

平成 7 年 度

埋藏文化財緊急発掘調査概報

垂 水 遺 跡

垂 水 南 遺 跡

1996 年 3 月

吹田市教育委員会

序

吹田市におきましては、昭和49年度国庫補助事業の埋蔵文化財発掘調査をはじめとして、これまでに数多くの発掘調査を実施して参りました。これらの調査からは、先人の残した数々の足跡を調査成果として得ることができ、地道ながら着実に吹田市の歴史を証言する資料を蓄積して参りました。そして、これらの調査成果は現地説明会や博物館などの場でできる限り市民の皆様へ還元できるようにと努めております。

平成7年度におきましても、国庫補助事業として市内遺跡の発掘調査を行いました。これらの調査では、垂水南遺跡で竪穴式住居跡や、これまでに出土例の余りない古墳時代の絵画土器を検出するなど、貴重な資料を新たに得ることができました。

しかし、こうした貴重な資料を検出した遺跡であっても、これら発掘調査の多くが開発行為を契機としており、調査終了後も、その遺跡が現状で保存されることは希なことというのが実情です。この現実、文化財保護の立場からはたいへん難しい課題であるといえますが、今後とも、より良き文化財保護の施策ができますよう努力していく所存であり、市民の皆様におかれましても、より深きご理解とご協力頂けますようよろしくお願い申し上げます。

平成8年3月

吹田市教育委員会

教育長 能 智 勝

例 言

1. 本書は平成7年度国庫補助事業として実施した、垂水遺跡、垂水南遺跡の緊急発掘調査をまとめたものである。
2. 発掘調査地点は次のとおりである。
第1次 垂水遺跡 吹田市円山町68-22、168-10
第2次 垂水南遺跡 吹田市垂水町3丁目16-3・15
3. 発掘資料の整理作業は、吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館において実施した。
4. 本文の執筆は、第1章 増田真木、第2章 賀納章雄、第3章 西本安秀が行った。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P.（東京湾標準潮位）を示す。
6. 発掘調査において、上田潤、亀田博之氏をはじめ、多くの方々の協力を得ました。記して謝意を表します。

発掘調査参加者名簿

- 調査主体 吹田市教育委員会
調査指導 大阪府教育委員会文化財保護課
調査担当 吹田市教育委員会吹田市立博物館文化財保護係 西本安秀・賀納章雄
調査補助員 大村 武・海邊博史・赤塚 亨・丹羽まどか・城田健一

目 次

第1章	平成7年度埋蔵文化財発掘調査の契機	1
第2章	垂水遺跡の発掘調査	2
第3章	垂水南遺跡の発掘調査	3

挿 図 目 次

第1図	発掘調査地点	1
第2図	垂水遺跡発掘調査地周辺図	2
第3図	調査区平面図	2
第4図	調査区土層断面図	2
第5図	垂水南遺跡発掘調査地周辺図	3
第6図	調査区土層断面模式図	3
第7図	調査区平面図	4
第8図	調査区土層断面図	5
第9図	G4 土器群平面図	7
第10図	G4 遺構平面図	8
第11図	G5 遺構平面図	9
第12図	G6 遺構平面図	9
第13図	G7 遺構平面図	10
第14図	出土土器実測図	12

図 版 目 次

図版一	垂水遺跡
図版二	垂水南遺跡1
図版三	垂水南遺跡2
図版四	垂水南遺跡3
図版五	垂水南遺跡4
図版六	垂水南遺跡5

報告書抄録

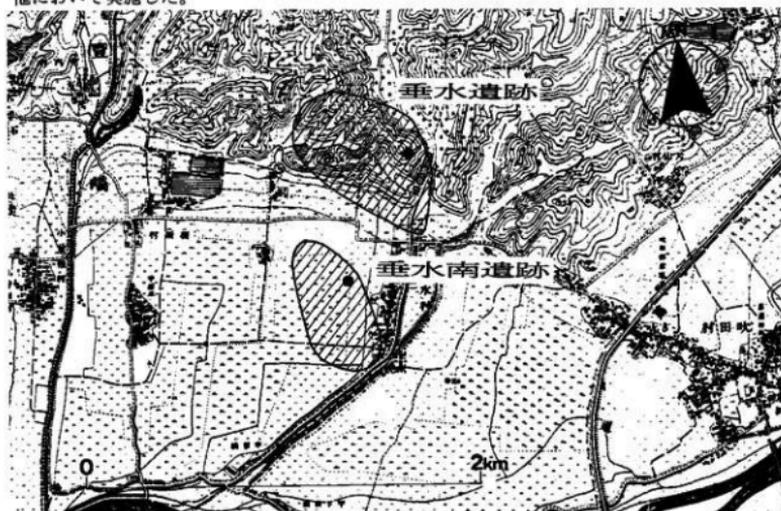
ふりがな	へいせい7ねんどまいぞうふんかざいきんきゅうはつくつちょうさがいほう		
書名	平成7年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報		
副書名	垂水遺跡 垂水南遺跡		
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編集者名	増田真木 西本安秀 賀納章雄		
編集機関	吹田市教育委員会		
所在地	〒564 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06)384-1231		
発行年月日	西暦 1996年3月29日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たるみいせき 垂水遺跡	すいたしまるやまちやう 吹田市円山町 68-22、168-10	27205	86	34° 45' 27"	135° 30' 00"	19950829	8	建物の 建築
たるみなみいせき 垂水南遺跡	すいたしたたるやまちやう 吹田市垂水町 3-16-3・15	27205	88	34° 45' 30"	135° 30' 24"	19951124～ 19951226	162	建物の 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
垂水遺跡	集落遺跡	弥生時代	なし	なし	なし
垂水南遺跡	集落遺跡	古墳時代	竪穴式住居、落ち込み、土坑、溝、ビット群	土師器、須恵器	絵画土器の検出

第1章 平成7年度の発掘調査

吹田市では昭和49年度から国庫補助事業として市内の遺跡の緊急発掘調査を行っているが、平成7年度は垂水遺跡及び垂水南遺跡において調査を実施した。垂水遺跡は千里丘陵南端の垂水町1丁目から円山町にかけて所在する遺跡であり、昭和初期に一部の宅地開発によって確認された遺跡である。昭和48年から51年にかけて、丘陵上の発掘調査が実施され、旧石器時代、弥生時代、室町時代の遺構・遺物が確認されている。特に弥生時代については、中期末から後期にかけて集落としての盛期が認められ、弥生時代の高地性集落として大阪湾岸に展開する遺跡群の中でも重要な位置を占める。一方、南方の丘陵裾から沖積平野にかけても弥生時代から中世にかけての遺構・遺物の展開が確認されている。今年度の調査は丘陵上の円山町68-22、他において実施した。垂水南遺跡は垂水遺跡南方の垂水町3丁目一帯の沖積平野上に所在する低地性の複合集落遺跡である。遺跡は弥生時代中期から鎌倉時代の各期に及ぶが、中でも古墳時代前期～中期の集落が遺跡の中心をなし、竪穴式住居、掘立柱建物、井戸、水田畦畔等の遺構が展開している。出土遺物は土師器が多く、初期須恵器も認められる。土器以外では未成品を含む滑石製を主とする勾玉・管玉等の玉作関係、羽口・鉾津等の鑄造関係、土錘等の漁撈関係の遺物が注目される。また、土師器は東海系、吉備系、山陰系等の搬入土器が多く認められ、本遺跡の性格を考える上で重要である。今年度の調査は遺跡東北端近くの垂水町3丁目16-3、他において実施した。



第1図 発掘調査地点(明治18年作成地図 ●調査地点)

第2章 垂水遺跡の発掘調査

1. 調査の経過

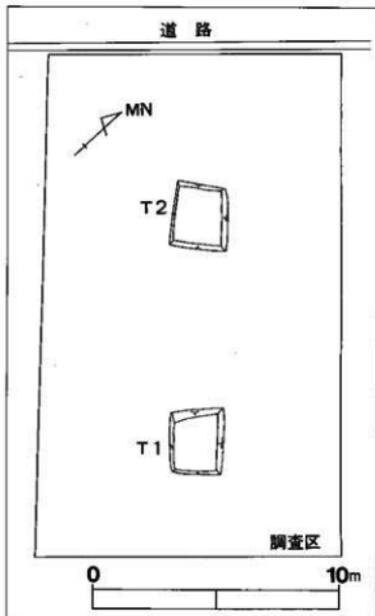
垂水遺跡は、千里丘陵南側に位置する旧石器時代から中世期にかけての複合遺跡である。今回の調査は、住宅の建築に伴う事前確認調査として実施した。調査については、平成7年8月29日に重機を用いて行った。

2. 調査の成果

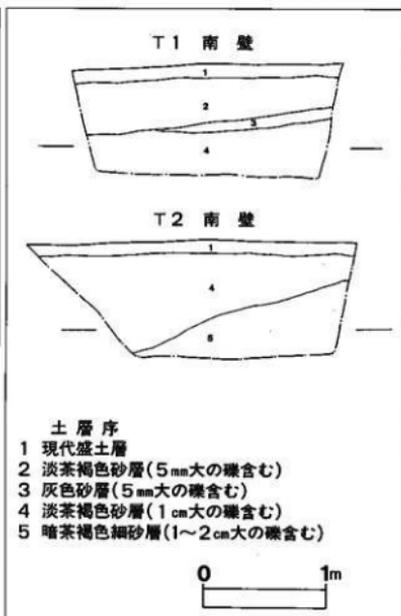
調査トレンチを2か所設定して掘削を行ったが、表土層以下、地山層である0.5~1cm大の礫を含む砂層の堆積を確認し、遺構・遺物については検出できなかった。



第2図 垂水遺跡発掘調査地周辺図 (1:5000)



第3図 調査区平面図



第4図 調査区土層断面図

第3章 垂水南遺跡の発掘調査

1. 調査の経過

今回の調査は吹田市垂水町3丁目16-3・15において実施したものである。当調査区は昭和52年に第4次調査として既に調査を実施したが、調査区の東半部を対象としたものであり、今回は未調査区のうち、開発にかかる部分を対象とした。調査は平成7年11月24日～12月26日に行い、調査面積は約162㎡である。調査区はG1～8を設定し、順次機械掘削、人力掘削を行った。その結果、G1では東西方向の溝、G4では土器群・竪穴式住居・土坑・柱穴、G5では溝・ピット群、G6では落ち込み・ピット群、G7では落ち込み・ピット群・小溝等の遺構を検出した。これらの写真撮影・図面作成等の記録作成後、器材を撤収して調査を終了した。



第5図 垂水南遺跡発掘調査地周辺図 (1:5000)

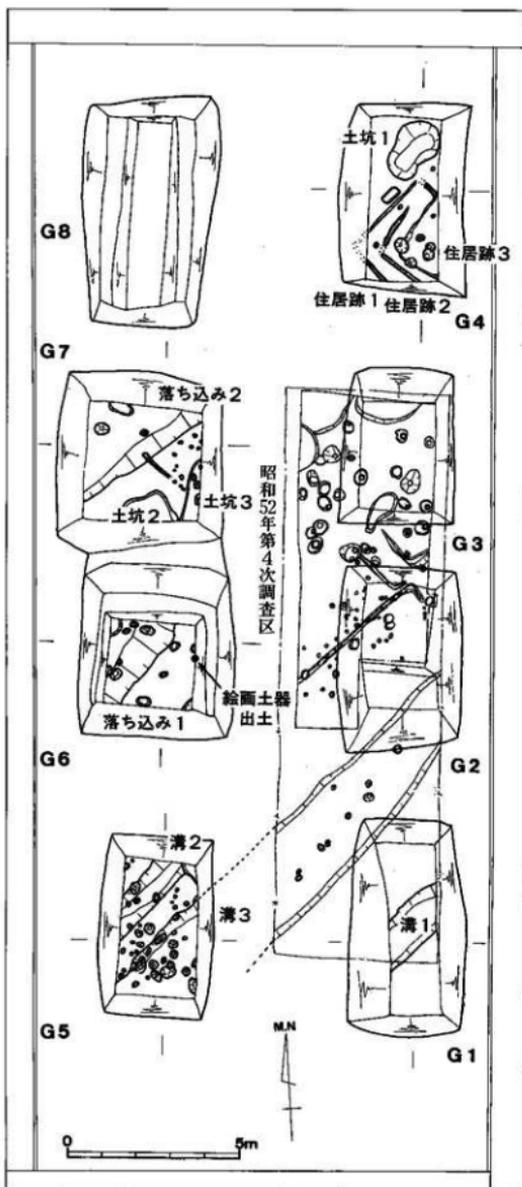
2. 調査の成果

a. 基本層序及び検出遺構

調査区の基本的な層序は、I層 盛土（現代）、II層 水田耕土（現代）、III層 灰色粘土（中世）、IV層 淡茶色砂質土、V層 黒褐色砂質土（遺物包含層、古墳時代）、VI層 淡黄灰色砂質土（遺構ベース層、古墳時代）、VII層 灰色系粘土と褐色系砂の互層、VIII層 暗灰色粘土、IX層 暗灰褐色粘土、X層 暗灰色シルトである。V層は調査区のほぼ全域で認められ、層厚15～30cmを測る。特にG4では濃密な土器群を形成していた。G5ではV層をベースとした溝3を検出した。これは、第4次調査で検出した溝の南西方向延長



第6図 調査区土層断面模式図

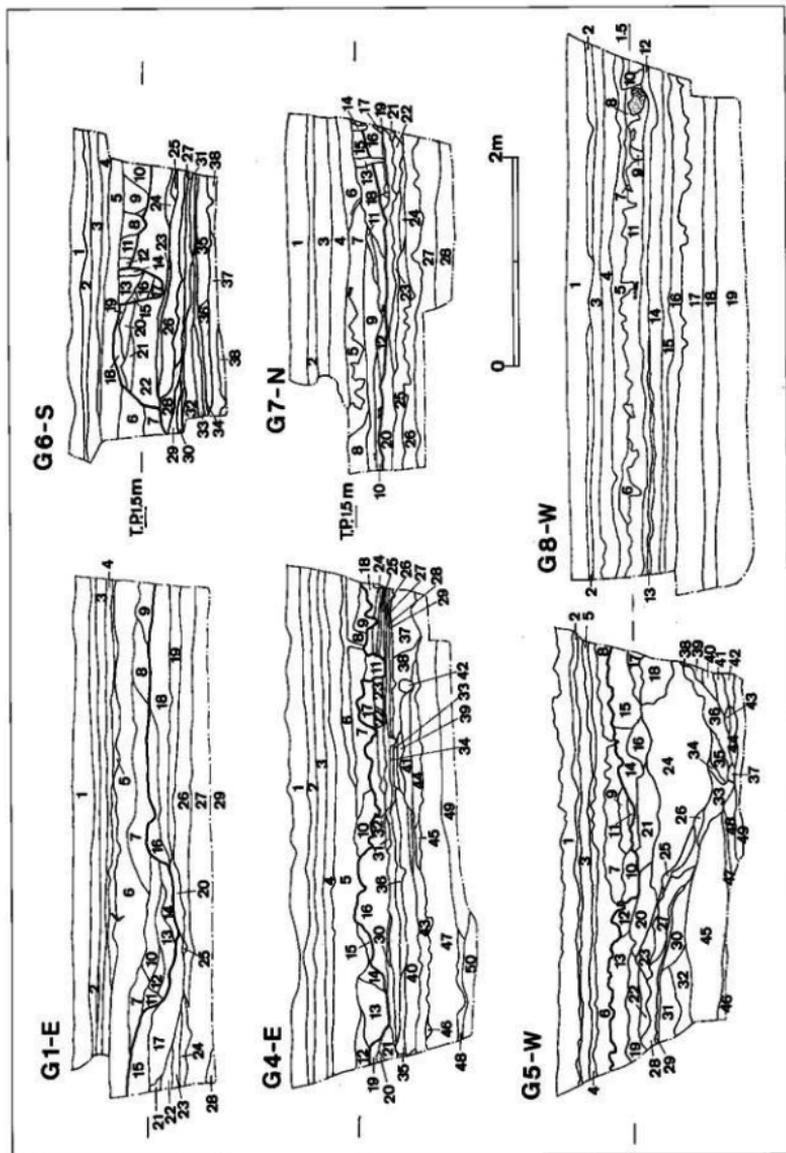


第7図 調査区平面図

部分に当たるものである。VI層は大部分の遺構のベースとなる土層であり、層厚20~30cmを測る。表面は凹凸がやや認められるが、比較的平坦で、ゆるやかに北側にながっている。この面で竪穴式住居・土坑・柱穴・ビット群・落ち込み・溝・小溝等の遺構を検出した。以下、各遺構について概略を記す。

竪穴式住居跡

G4で検出したもので、L字状の小溝を2条、方形落ち込みを1基確認した。北西に位置するものから住居跡1~3とした。住居跡1は幅約15cm、深さ約7cmを測るL字状の小溝を認め、住居の壁溝と思われる。この溝から直角に幅約12cm、深さ約7cmを測る小溝が取り付け、間仕切りの溝の可能性がある。住居跡2は幅約13cm、深さ約4cmを測り、住居跡1の内側に位置するL字状の小溝である。住居跡1より遺存状況は良くない。周辺に径約5~10cm、深さ約5cmの小ビットが10基認められ、木質部の遺存するものもあるが、いずれの住居跡に伴うか特定できない。住居跡3は深さ約10cmを測る方形の落ち込みを部分的に検出した。床面はほぼ平



第 8 图 调查区土层断面图

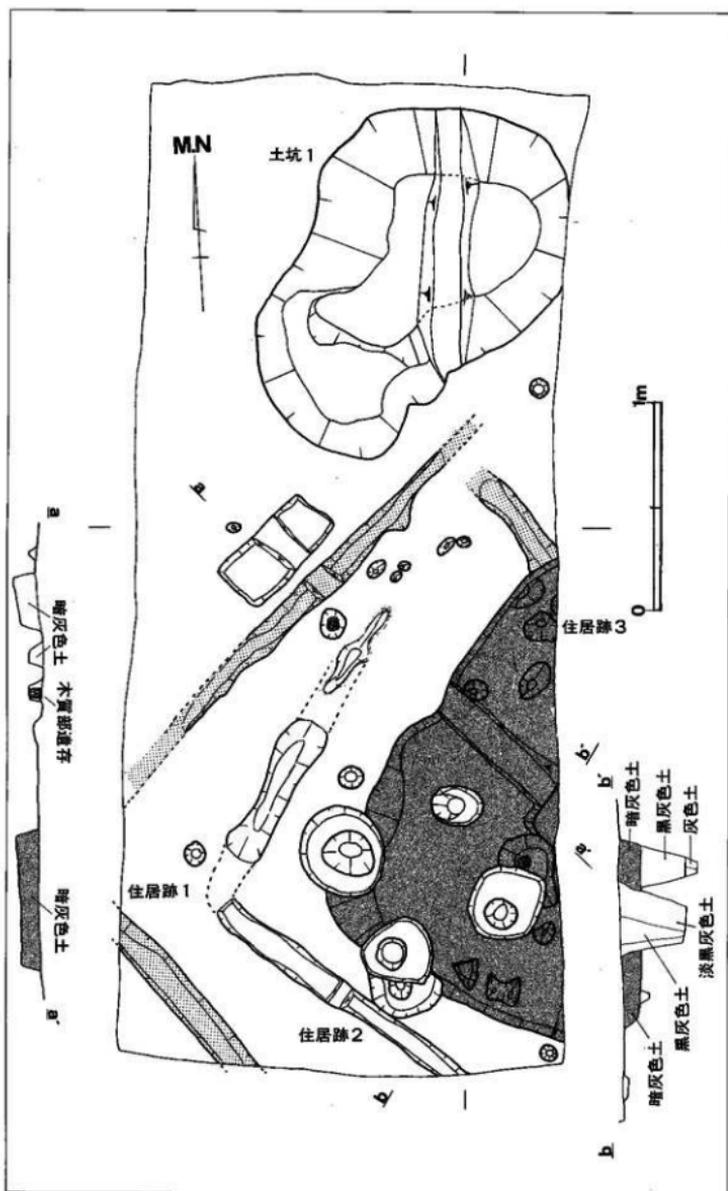
坦で、径約25cm、深さ約25cmの柱穴を検出したほか、径約5～20cm、深さ約8cmの小ピットを8基認めた。

土坑

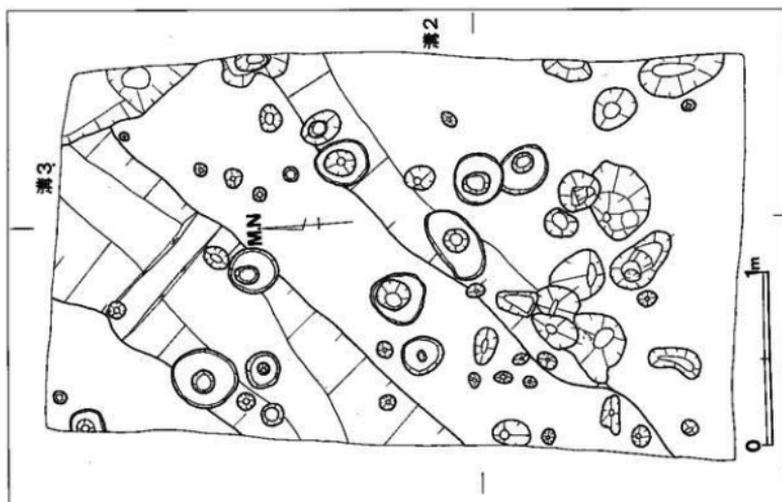
土坑1はG4の北側で検出し、180×120cm大の楕円形のもので、堆積土は数層に分かれる。土師器の破片が出土した。土坑2はG7南端で部分的に検出し、方形を呈する。土坑3は土坑



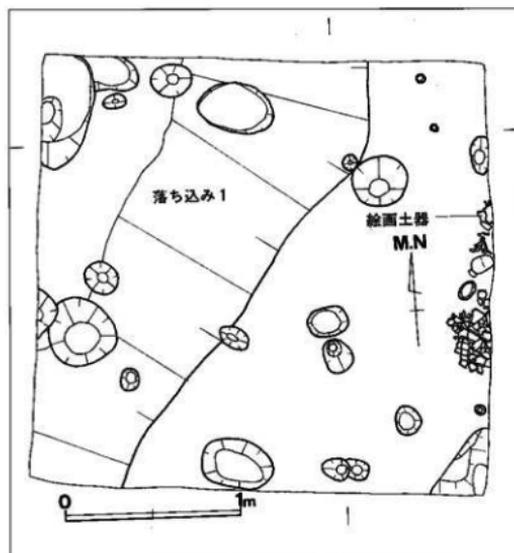
第9図 G4 土器群平面図 (1:17)



第10圖 G4 遺構平面圖



第11図 G5 遺構平面図



第12図 G6 遺構平面図

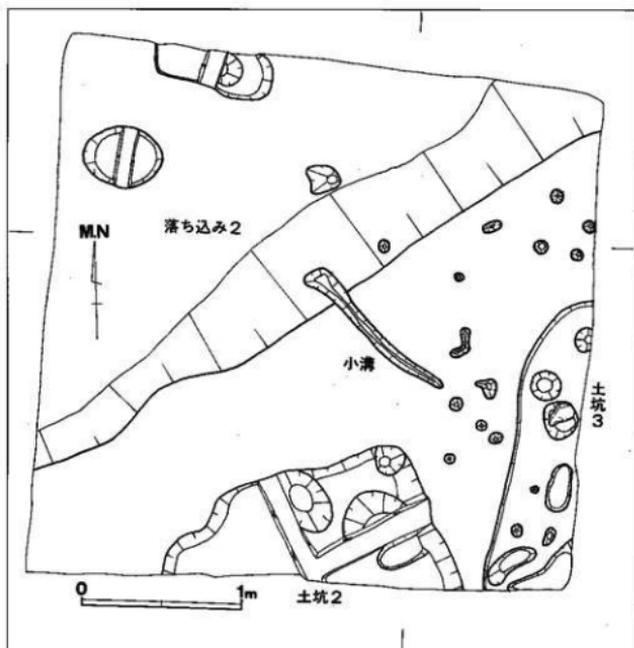
2の東隣に位置し、部分的に確認した。いずれも出土遺物が認められるが、具体的な性格については明らかにできなかった。

溝

溝1はG1で検出した東西方向のもので、幅約120cm、深さ約30cmを測る。砂の堆積層が認められるので、流水があったものと思われる。溝2はG5で検出した幅約100cm、深さ約20cmを測るもので、溝1とほぼ同一方位である。

柱穴

G4では住居跡3が堆積した後に造られた5基のうち、4基が柱芯間距離55



第13図 G7 遺構平面図

cmで正方形に並ぶが、その展開方向については不明である。G5では径約10cmの小ピット25基、径20～40cmのピットを29基検出したが、配列に規則性が認められない。

落ち込み

G6・7で落ち込みの肩部を検出した。いずれも北西方向に向かって傾斜するものである。

土器群

遺物包含層であるV層はG4の南半部では濃密な土器群を形成していた。出土状況に規則性は認められず、破片が多いことから、近隣の住居域からの排出された土器溜まりと思われる。出土土器は、土師器（壺・甕・高杯等）、須恵器（甕）、製塩土器等がみられる。古墳時代前期～中期の所産と判断される。

b. 出土遺物

各グリッドの遺物包含層、遺構等から古墳時代の遺物を遺物収納箱約12箱分検出した。G4の遺物包含層からの出土遺物が最も多く、遺存状況の良好なものも認められたが、ほとんどは破片である。G6からは、注目すべきものとして絵画土器（土師器）が出土した。ここでは、図化できた主な遺物の概略を記すこととする。

(1) G4土器群出土遺物(第14図1~9)

(1)は土師器壺である。復元径12.2cm、器高15.7cmを測る。口頸部は大きく開き、端部はやや丸い。外面はハケ及びナデ、内面は指頭による押圧調整を行う。

(2)は土師器壺である。口径5.9cm、器高7.7cmを測る。ほぼ直立する口頸部をもち、端部は肥厚気味に丸くおさめる。外面はタテハケ、内面は指頭による押圧調整を行う。

(3)は土師器甕である。復元径12.0cm、残高16.0cmを測る。くの字状に屈曲する口頸部の端部はやや丸い。外面は指頭による押圧調整の後、ヨコハケ、内面は指頭による押圧調整の後ヘラケズリを行うが、接合痕が認められる。体部外面には煤の付着が顕著である。

(4~8)は土師器高杯である。(4~6)は外上方に大きく広がる杯部の下半に段を有し、(7)は無段である。(4)(8)は中空の杯部と脚部の接合の際、杯部内底面に粘土を充填する方法を採用している。(4)は杯部外面はわずかにタテハケが残り、内面はヨコハケを行う。脚部外面は押圧調整の後タテハケ、内面はヨコヘラケズリを行う。口径16.5cm、器高12.6cm、脚部径12.5cmを測る。

(9)は製塩土器の脚部である。内外面とも押圧調整を行い、底径4.5cmを測る。

(2) 土坑1出土遺物(10・11)

(10)は土師器二重口縁壺の口縁部である。復元径31.3cm、残高6.2cmを測る。口唇部は横方向の荒いハケ調整が施されている。端部はやや丸い。他地域産のものと思われる。

(11)は土師器甕である。復元径17.0cm、残高12.0cmを測る。くの字状に屈曲する口頸部の端部はやや丸く、内面にやや肥厚する。外面はヨコハケ、内面はヨコヘラケズリを行う。外面肩部に径約0.4cmの刺突文が3か所認められる。

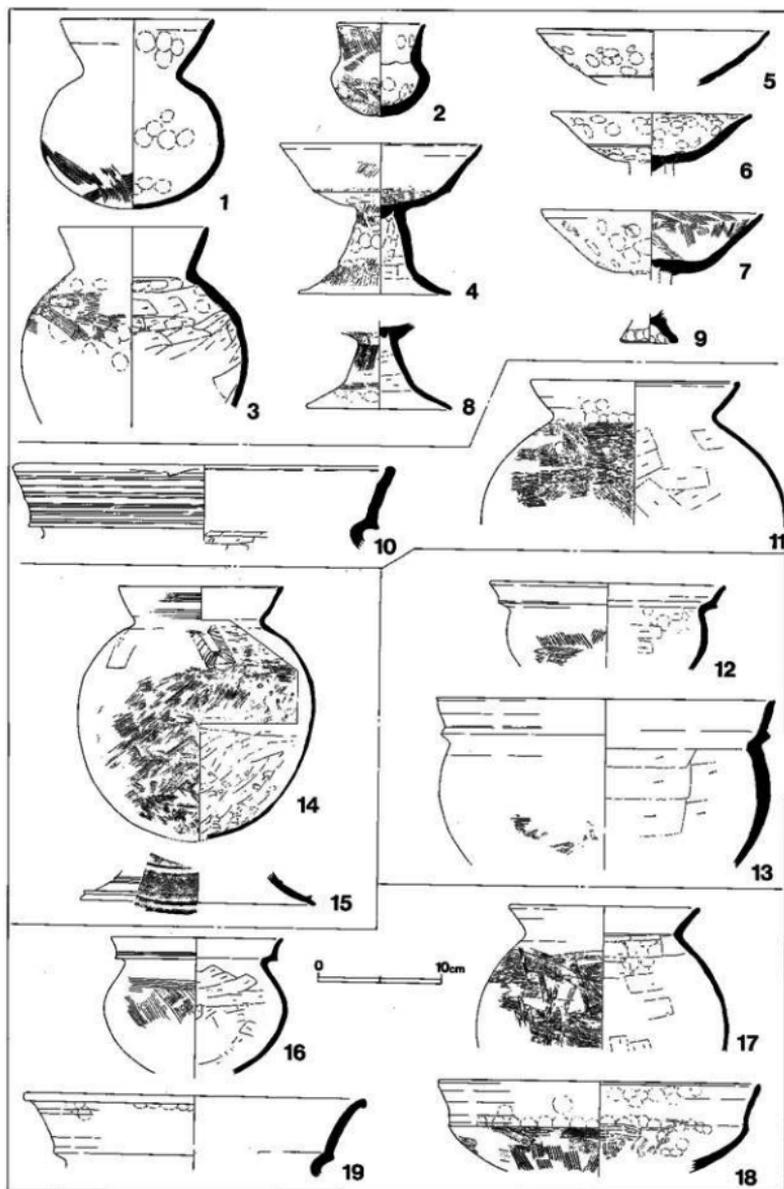
(3) 溝1出土遺物(12・13)

(12)は土師器鉢である。復元径19.0cm、器高7.0cmを測る。二段に屈曲する頸部をもち、口縁端部はやや丸い。外面端部はタテタキの後、ヨコハケ、内面は押圧調整の後ヘラケズリを行う。

(13)は土師器大型鉢である。復元径27.6cm、残高13.9cmを測る。二段に弱く屈曲する頸部をもち、口縁端部はやや丸い。外面はヨコハケの後、ナデ、内面はヨコヘラケズリを行う。

(4) G6遺物包含層出土遺物(14・15)

(14)は土師器甕である。復元径13.4cm、残高21.0cmを測る。くの字状に屈曲する口頸部の端部はやや丸く肥厚する。外面はナナメハケ、内面は押圧調整の後ヘラケズリを行う。外面肩部にヘラによって描かれた絵画を2か所で認め、向かって右側のものを絵画A、左側のものを絵画Bとした。絵画Aは縦5cm、横2.4cmの矩形の下端に丸い屋根形の線が加えられ、その内側に縦2.2cm、横0.7cmの矩形、さらに内側から外側へ斜線が23本引かれたものである。絵



第14图 出土土器实测图

画Bは逆台形の輪郭のみで、遺存状態が悪く不明瞭である。上端3.4cm（復元長）、下端2.5cm、高さ4.6cmを測る。外面は煤の付着はほとんど認められない。また、腹部最大径付近に米粒状の刺突文を7か所認めた。

(15)は須恵器器台もしくは高杯の脚部である。裾部復元径19.2cm、残高2.6cmを測る。裾部下端付近に突帯、上方に凹線をめぐらし、その間に櫛描波状文を施す。

(5) G7 出土遺物 (16~19)

(16)は土坑2出土の土師器甕である。復元径14.0cm、残高11.0cmを測る。二段に強く屈曲する頸部をもち、口縁端部はやや丸い。外面はタテハケ、一部にヨコハケを施し、内面はヘラケズリを行う。

(17)は遺構上面出土の土師器甕である。復元径15.4cm、残高11.9cmを測る。くの字状に屈曲する口頸部をもち、口縁端部はやや丸い。外面はヨコハケ、内面は押圧調整の後ヘラケズリを行う。体部外面には煤の付着が顕著である。

(18)は遺構上面出土の土師器大型鉢である。復元径26.0cm、残高7.4cmを測る。弱く屈曲しながら外反する口縁端部は丸い。外面下半はタテ及びヨコハケ、外面上半はヨコナデを施し、内面は押圧調整の後、ヘラミガキ及びヨコナデを施す。

(19)は遺物包含層出土の土師器壺である。復元径27.6cm、残高6.1cmを測る。二段に屈曲する口縁を外方へ弱く折り返し、端部は丸い。内外面ともヨコナデを施す。

3. まとめ

今回の調査の結果、昭和52年の第4次調査で検出した遺構以外に新たに竪穴式住居3棟、土坑4基、溝3条、落ち込み2か所を検出し、第4次調査で3号住居址とされたものは溝と判明し、溝1と変更した。

調査区の遺構の展開状況は、北西部に落ち込みがあり、北東部から南西部にかけての微高地に住居域が展開しているとみられる。

住居跡は総じて遺存状態が悪く、床面はすでに削平され、壁溝が部分的に残るにすぎず、古墳時代の住居の実態を把握するまでには至らなかった。ただ、住居跡1で間仕切り溝と思われる溝を検出したのは成果であろう。間仕切り溝については、従来、屋内空間を分割するために設けられた溝と考えられてきたが、近年、木材を埋め込んで根たし^(脚1)、その上に板材をわたして床を張り、寝所とする転し根たしの痕跡とする意見もあり、当時の生活様式を解明する上で注目すべきものといえる。

遺構の形成時期については、竪穴式住居・土坑・溝・落ち込み等は出土遺物から布留式前半期、柱穴群はこれより少し遅い段階、土器群はさらに後の布留式末の段階とみられる。

出土遺物については、ほとんどが布留式に属す古墳時代前期~中期の土師器で、少量の初期須恵器の細片がみられた。これまでの調査成果を大幅に修正するものではないが、今回、類例

の少ない絵画土器が出土したので、これについて若干の考察を行いたい。

絵画土器はG6の遺物包含層から出土し、住居域から排出されたものが堆積したものとされる。いわゆる布留式土器の變である。外面体部に煤の付着がほとんどなく、肩部に二種の絵画が描かれている。絵画Aは二重の矩形に多くの斜線が引かれ、短辺の片方が丸い尾根形を呈し、絵画Bは縦長の台形をしているという特徴がある。土器を正面から見た状態では近似例はないが、^(註3)真上から見た状態では似た例として「盾」を挙げることができる。盾の実例は豊中市御獅子塚古墳、奈良県高取町市尾・今田1号墳出土例にみられ、^(註4)埴輪に描かれたものとして、八尾市美園古墳出土例がある。美園古墳出土例は家形埴輪の外壁にタイプの異なる4面の盾が描かれている。これらの特徴は二重に矩形があり、上部が山形を呈するもの、もしくは四角のものがあ、外縁は鋸歯文が描かれているのが多い。今回の垂水南遺跡出土例は二重の矩形に共通性があり、多くの斜線は鋸歯文の片方の線を省略したものとするなら、「盾」を描いたものと思われる。そうすると、上部が山形のものと同角のものタイプの異なる2種の盾を描いたことになり、美園古墳の家形埴輪例に共通点が多いといえよう。では、盾を描くことどのような意味があるのか。美園古墳例では新嘗祭の際に神が降臨する建物に盾を掛けたもので、^(註5)辟邪が目的という意見があり、新嘗祭かどうかはともかく、何らかの祭祀の際に辟邪のため描かれたものかもしれない。

さて、絵画土器は一般に畿内では弥生時代中期に盛行し、後期には衰退して記号文となる。^(註7)一部布留式期にも變の肩部に波状文・列点文が施されたり、へら記号状のものが認められるが、絵画といえるものは極めて少ない。このように、布留式期には土器に絵画はほとんど描かれなかったこと、一般に絵画・記号文が描かれることの少ない甕に描かれていること、外面に煤の付着がほとんどないこと、2種の盾が描かれていることなどを総合すると、今回の出土例は特殊な祭祀等の用途のために製作され、使用されたものと考えることができよう。

註1 石野博信「考古学から見た古代日本の住居」『日本古代文化の探求・家』1975

2 辰巳和弘「古墳時代の社会と生活」『日本の古代5 前方後円墳の世紀』1986

3 豊中市教育委員会編「御獅子塚古墳の発掘調査」『文化財ニュース豊中』NO.4 1986

4 今尾文昭・長谷川俊幸「高取町市尾今田古墳群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1981年度』1983

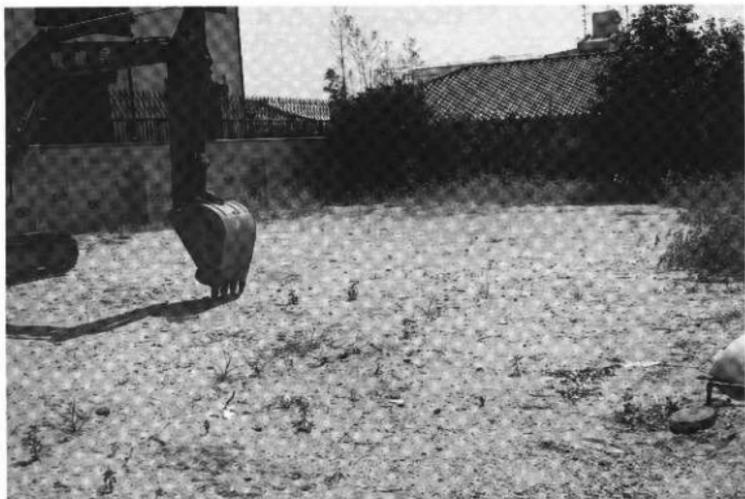
5 波辺昌宏ほか「美園一近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書一」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター編 1985

6 註2に同じ

7 佐原 真「弥生土器の絵画」『考古学雑誌』第66巻1号 1980

春成秀賢「絵画から記号へ—弥生時代における農耕儀礼の感衰—」『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』1991

8 次山 洋「波状文と列点文—布留形甕にみられる肩部文様の変遷・承継・分布—」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集 1995



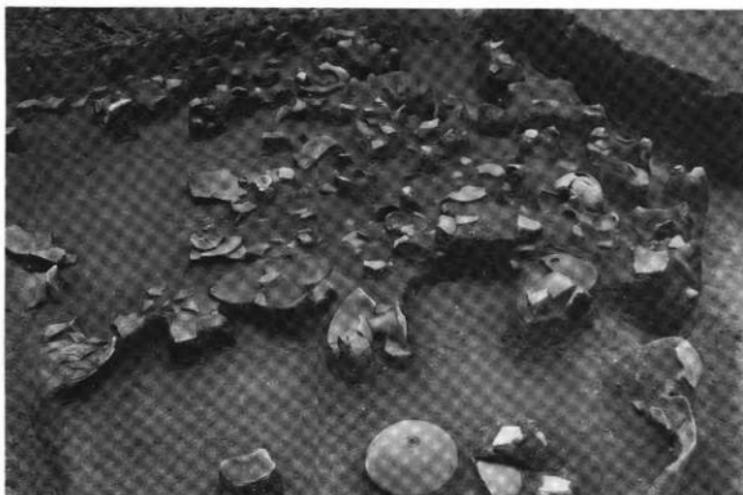
調査地近景（西から）



T1 掘削状況（北から）



G4 土器群検出状況
(南から)



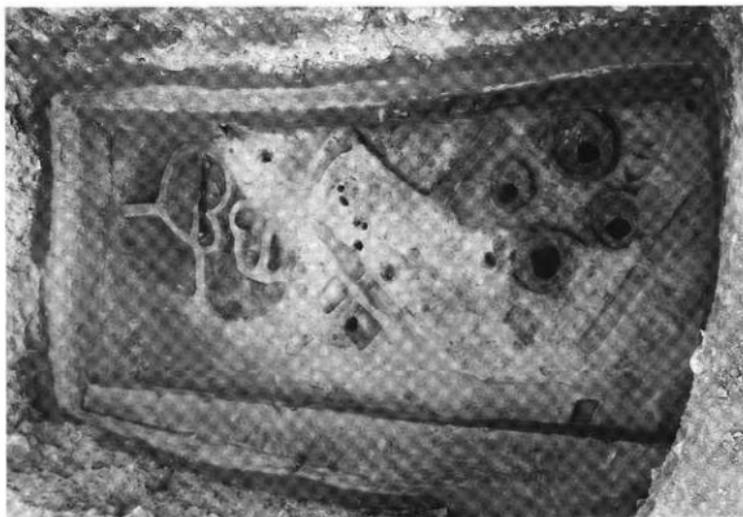
G4 土器群細部 (北から)

図版三 垂水南遺跡2

G4 遺構上面出土状況(南から)



G4 遺構出土状況(南から)

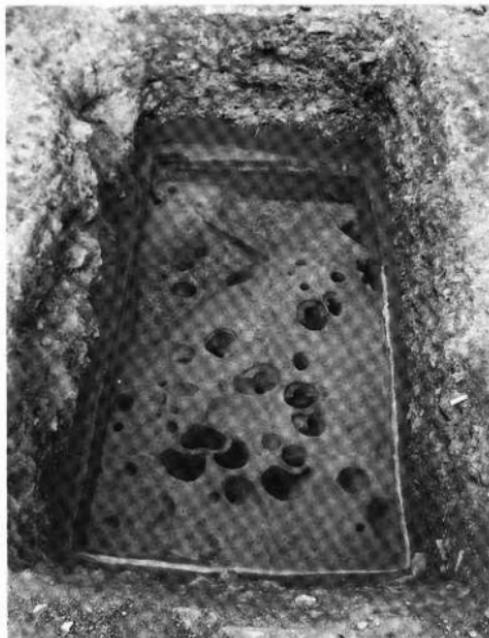




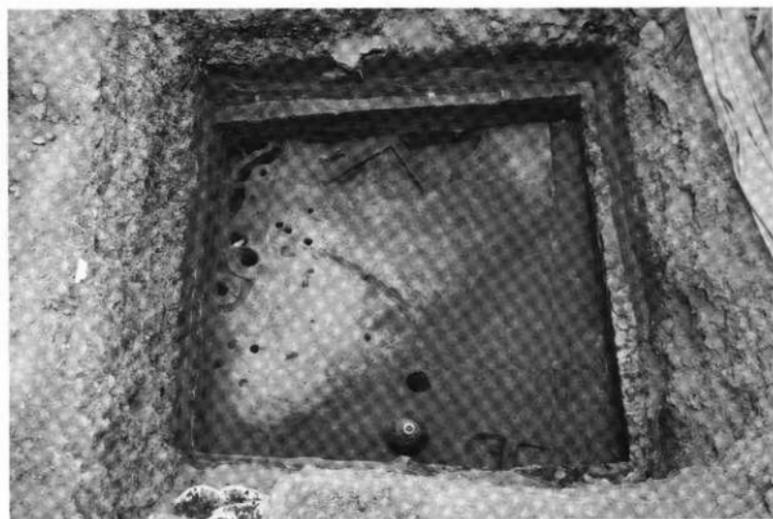
G4 竖穴式住居跡（北西から）



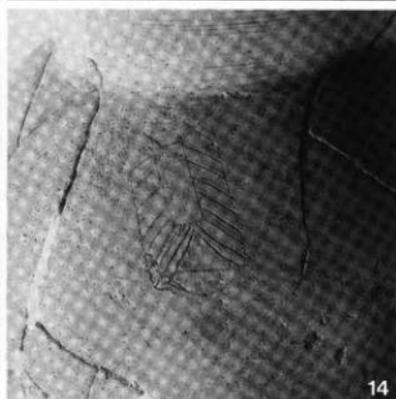
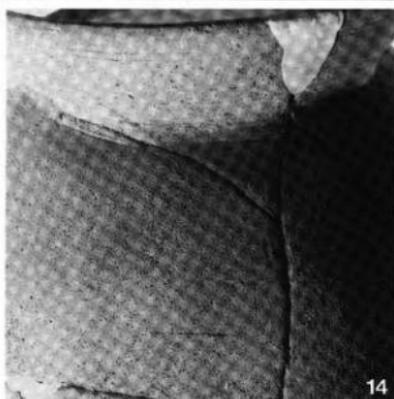
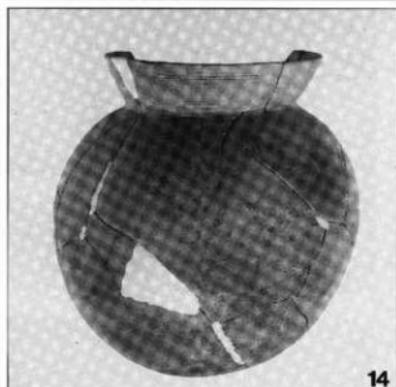
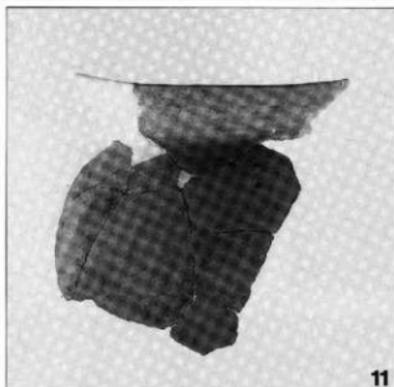
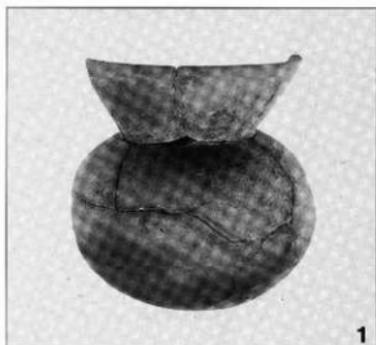
G4 土坑1（西から）



G5 遺構検出状況
(南から)



G7 遺構検出状況 (北から)



〔平成7年度〕

埋蔵文化財緊急発掘調査概報

垂水遺跡
垂水南遺跡

平成8年3月29日

編集 吹田市泉町1丁目3番40号
発行 吹田市教育委員会